

物語教材の全体構成の把握に関する研究

— 宮沢賢治童話の対比的構成に着目した指導法の開拓 —

今井 奈なえ

1 研究の目的

平成20年1月に中央教育審議会によって答申された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、21世紀を、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会の時代」ととらえ、これからの時代を担う子どもたちが現代社会において自立的に生きる力を育むため、各教科において「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等の育成」を目指すことが強調されている¹。特に国語科は、思考力・判断力・表現力等の基盤となる「言語の能力」を育成するための重要な教科である、ということを我々教師は再認識し、その指導の在り方を見つめ直すことが今求められている。

文学的文章の指導においては、以前から、文章の初めから順を追って登場人物の気持ちや場面の様子を丁寧に読み取っていく教師主導の授業が多く行われ、問題視されてきた。また、基本的に教師は多様な意見が出ることが望ましいと考える傾向があり、児童から出されるどんな読みも受け入れてしまうので、結局どの読みが妥当であったのかははっきりしないまま先へ進んでしまう授業も多かったように感じられる。このような授業の繰り返しでは、その授業でどんな力がついたのかを自覚することができず、児童は達成感や満足感を味わうことができないであろう。また、どの学年でも同じような指導が繰り返され、高学年になっても教師の先導がなければ文章を読み解くことができないということも大きな問題であると考ええる。

鶴田(2010)は、文学的文章の読みの在り方を〈解釈〉と〈分析〉の2側面ととらえている。〈解釈〉とは、「読者の生活経験に基づく既有知識(前理解)をもとにテキストを対話的・歴史的・状況的に理解するという読み」のことであり、〈分析〉とは、「理論的・科学的な知識(コード)をもとにテキストを還元的・共時的・技術的に理解するという読み」であると説明している²。この定義を用いると、これまでの文学的文章の指導は、〈解釈〉に偏ったものが多かったと言えるであろう。しかし、〈解釈〉は個人的なものであり、その児童の経験や能力、考え方によって違ってくる。もちろん、学級集団で学ぶ意味の一つは、多様な考えを出し合うことで、自己の考えを見つめ直し、より良い考えを創り出すことであるから、各々の解釈を話し合うことにも意義はあろう。しかし、文学的文章の読みの授業において、文章の叙述や構成に根拠を持たない恣意的な読みをいくら交流したところで、作品の本質に迫るような読みに辿りつくことはできないのではないだろうか。現在多くの国語の授業で見られる、〈解釈〉を交流し合うことに終始する授業では、「読みの力」を付けることはできないと考える。

では、読みの授業で身に付けるべき「読みの力」とは何か。一言で言えば、それは

「自力で読み解く力」と言えるであろう。現代の学校教育が「自立的に生きる力を育成すること」を目指していることを踏まえれば、国語科の文学的文章の読みの指導において、この「文章を自力で読み解く力を育てる」ということを、今後より一層意識する必要があると考えるのである。

自力で文章を読み解くためには、まずその「方法」を習得する必要がある。そこで、本研究では、読みの方法の一つとして、「文章の全体構成を把握すること」を提案したい。「木を見て森を見ず」という諺もあるように、細部に気を取られては、全体を見失ってしまう。全体が把握できてこそ、部分の意味や役割が分かるものである。文学的文章の読みにおいて、「文章全体を把握すること」により、ストーリーの大まかな流れをつかむことができるとともに、感覚的・主観的にではなく、論理的・客観的に、登場人物の相互関係や心情の変化等を読み解くことができると考える。

今回の研究では、文章全体を把握するための具体的な手立てとして、「構成図」を作成することを提案する。教材としては、光村図書の6年教科書の定番教材である「やまなし」を扱う。「やまなし」は、内容が難解で、その指導方法について頭を悩ませる教師も少なくない。そこで、この作品の対比的な構成に着目し、全体を把握するための「構成図」を作成することで、児童にとっての内容理解の困難さ、また、教師にとっての指導の困難さを克服できると考え、本研究に取り組むことにした。

2 全体構成を把握する力とその意義

これまで国語科の「読むこと」において、「構成をとらえる」ということは、物語の「起承転結」をとらえること、また、説明文では「はじめ・なか・おわり」をとらえること、すなわち、段落と段落の並び方・つながり方をとらえることと解釈され、指導が行われてきたように思う。

しかし、「構成」は、単なる文章の形式を指すものとして指導するべきなのであるか。「構成」という語について、『大辞泉』では、「いくつかの要素を一つのまとまりのあるものに組み立てること。また、組み立てたもの。³⁾」と書かれている。また、『日本語文章・文体・表現事典』によれば、「主に文章の展開形態として、時間的順序を重んじた全体の配列⁴⁾」とある。つまり、「構成」には、「各要素がつながり合い、組み合わせられてきたもの」という意味があることが分かる。従って、一つの文章を成り立たせるための各要素に着目し、それらの配置の仕方、かかわり方、つながり方をとらえることが「構成をとらえること」だと言えるのではないだろうか。これを物語文に当てはめて考えると、ある一つの文章を成り立たせるための各要素(時や場、人物、出来事)の、時間的順序を重んじた配列の仕方、それぞれのかかわり方、つながり方をとらえることが、「構成をとらえる」ということであると言える。

ただ、先にも述べたように、「構成」という語は、一般的に「文章の類型・形式」と解釈されることが多いため、これとの差別化を図るため、本研究では、「全体構成」と呼ぶことにする。

全体構成＝物語を成り立たせるための各要素(時や場、人物、出来事)の、時間的順序を重んじた配列の仕方やそれぞれのかかわり方、つながり方

つまり、「全体構成を把握する」とは、「物語を成り立たせるための各要素（時や場、人物、出来事）の時間的順序を重んじた配列の仕方やそれぞれのかかり方、つながり方」を俯瞰的にとらえることである。これは、物語の「形式」をとらえることではなく、物語の「内容」を大まかにとらえることであり、物語理解を助ける役割を果たすものとなり得ると考える。

では、「全体構成を把握する力」を身に付けることにどのような意義があるのだろうか。まとめると、次のようになる。

- 1 物語展開の概略把握
- 2 場面移行の因果関係の把握
- 3 中心人物の心情変化の把握
- 4 中心人物と周辺要因の相関関係の把握
- 5 主題の仮説的把握

以上のような意義を踏まえると、この「全体構成を把握する」学習は、その教材の指導の導入段階に位置づけてこそ、その効果を発揮するものであることがわかる。「文章構成を把握する」ということは、「地図」を持つことに似ている。「地図」をもつことにより、全体を見通すことができ、自分の今いる位置が把握できるので、安心して歩を進めることができる。また、自力で歩く力を身につける為、すなわち自力で文章を読み解く為にも、「地図」が必要なのである。

3 全体構成を把握する方法

それでは、具体的にどのような「地図」を作成すれば、全体構成を把握することができるのだろうか。本研究は、小学校段階における指導を想定している。そして、学力に関係なくどの児童も理解でき、いずれは自分の力で描くことができる「地図」を考案したい。そこで、以下の3点を基本的な観点とする。

- ①焦点化する ②簡略化する ③視覚化する

全体を把握するために必要なことは、端的に言えば「一目で分かるようにすること」である。一目で分かるためには、焦点を絞り、簡潔にまとめ、視覚化することが効果的だと考える。そこで、文学的文章の全体を把握するため、文章全体を「図式化」することを提案したい。ここにいう「図式化」とは、ストーリーの流れや物事の間接関係を理解しやすくするためにその概略を視覚的に表示することである。

では次に、どのようにして文章を図式化していくかについて考える。

まず、図（「構成図」と名付けることにする。）に何をどう配置するかという問題がある。文学的文章の最も重要な要素は、【登場人物】である。登場人物がいなければ、ストーリーが成り立たないからである。【登場人物】の中には、いわゆる主人公である「中心人物」がいて、その人物に深く関わる「対人物」がいる。その「中心人物」と「対人物」とのやりとりで物語は展開していく。だから、まずは【登場人物】（中

心人物と対人物)を配置することが必要である。その際、中心人物と対人物を対比的に配置することによって、関係性を把握しやすくする。

次に配置すべきことは、登場人物の【主な行動や発言】である。物語の大まかな流れをつかむためには、「誰が何をした」「誰が何と言った」という【行動や発言】も重要な要素になってくる。物語には「筋」があり、出来事(事件)が起こる。そこには必ず登場人物の【行動や発言】が絡んでくるものであり、【行動や発言】を読み取ることで、出来事の展開をつかむことができる。しかし、文章中には【行動や発言】が数多く存在する。その中から、物語展開に関わるもの、対人物との関係性の中で重要なものをピックアップして、できるだけ簡略化した言葉で書き入れる。ここまでの作業によって、文章全体が整理され、物語の大まかな流れをつかむことができる。

しかし、この構成図は、全体の流れを把握するのみならず、人物や事柄同士の関係性や人物の心の変容、展開の仕掛けにも気付くことができ、延いては主題に迫ることもできるものである。よって、人物相互の行動や発言の【因果関係】を線でつないだり、そこから分かることを書き添えたりする段階を加えたい。

ここまで述べてきたことをまとめると、次のようになる。

〈構成図作成の流れ〉

- 第1段階 ストーリーの流れに沿って、【登場人物】(中心人物と対人物)を配置する。
- 第2段階 登場人物それぞれの【主な行動や発言】を書き入れる。
- 第3段階 人物相互の気持ちや行動の【因果関係】が分かるように、線でつないだり、そこから分かることを書き入れたりする。

この一連の流れによって、文章の「主筋(メインプロット)」をとらえることができると考える。

4 「やまなし」の全体構成を把握するための指導の実際

次に、〈構成図作成の流れ〉に沿って、文章の叙述に基づいて「やまなし」の構成図を作成していく過程を述べていきたい。なお、「やまなし」は「五月」と「十二月」の二部構成になっているため、まず、それぞれの構成図を作成する過程を述べ、その後、「五月」と「十二月」を並べ、全体を俯瞰することによって読み取ることができることについて詳述する。⁵

〈五月〉

- 第1段階 ストーリーの流れに沿って、【登場人物】を配置する。

中心人物は「かにの兄弟」、対人物は「生き物」である。かにたちが見た「生き物」(生物・植物)を登場した順に並べると、〈クラムボン〉、〈魚〉、〈かわせみ〉、〈かばの花〉となる。「クラムボン」は実際に本文の中で姿を現すわけではないが、冒頭の兄弟の会話の中で繰り返し出てくるキーワードであるため、登場人物として扱う。なお、「かに」を下に、「生き物」を上配置することで、実際の「谷川の底」における位置関係をつかむ効果も期待できる。「かに」は、〈兄弟〉と〈お父さん〉に分け、両者の

関係性がよく分かるよう、「かに」の枠内に対比的に並べた。(図1)

第2段階 登場人物それぞれの【主な行動や発言】を書き入れる。

かにの兄弟が〈クラムボンについて話をしている〉。兄弟の会話から、クラムボンは、〈笑い、はね、殺され、死んでしまう〉存在であることが分かる。そこへ魚がやってくる。魚は〈上流と下流を行ったり来たり〉している。すると、突然かわせみが水中へ〈飛び込んでくる〉。それを見ていたかにの兄弟は、〈居すくまってしまう〉。そこに、兄弟のお父さんがやってきて、「だいじょうぶだ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。」と教え、なだめる。しかし、兄弟の恐怖心は収まらず、〈「こわいよ、お父さん。」〉と怯え続ける。そこへ白くてきれいな「かばの花」が〈流れて〉くる。父親が〈「きれいだろう。」〉と声をかけるが、それでも兄弟は、〈「こわいよ、お父さん。」〉と怯え続ける。(図1)

「やまなし」構成図〈五月〉

<p>かばの花 流れてくる</p> <p>かわせみ いきなり飛びこんでくる</p> <p>魚 上流と下流を行ったり来たりする</p> <p>クラムボン 笑った はねた 死んだ 殺された</p>	<p>生き物</p>
<p>兄弟 クラムボンについて話している。</p> <p>「こわいよ、お父さん。」</p> <p>「こわいよ、お父さん。」</p> <p>居すくまる</p> <p>お父さん 「だいじょうぶだ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。」</p> <p>「きれいだろう。」</p>	<p>かに</p>

図1 「五月」の構成図（第1段階・第2段階）

第3段階 人物相互の気持ちや行動の【因果関係】が分かるように、線で結んだり、そこから分かることを書き入れたりする。

まず、クラムボンと魚とかわせみの関係性に気付く。クラムボンは魚に食べられる。魚はかわせみに食べられる。三者は互いに【食べる】【食べられる】の関係であり、ここに「食物連鎖」と「弱肉強食」の世界を見て取ることができる。かにの兄弟は、最初〈クラムボン〉について他愛のない会話をしている。兄弟にとって〈クラムボン〉は、笑ったりはねたりすることをすでに知っている（既知の存在）であり、しかもそ

の会話の様子とはとても〈無邪気〉で余裕すら感じられることから、自分たちより弱い存在と認識していることが分かる。しかし、魚の出現によって、二匹の会話の雰囲気は徐々に変化していく。兄さんのかにが「何かを取ってるんだよ。」と弟に教えると、二匹は身の危険を感じ始める。そして、かわせみの突入である。〈かわせみ〉は、二匹にとって〈未知の存在〉である。しかも、〈水上〉という〈未知なる世界〉からいきなり飛びこんできた〈未知の存在〉に対する恐怖心は相当なものである。それゆえ、お父さんが「だいじょうぶだ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。」と教えても、きれいなかばの花に目を向けさせようとしても、二匹の恐怖心は拭い去ることができないのである。つまり、〈五月〉の谷川の底は、〈かわせみ〉の突入によって、「平和な世界」から「恐怖の世界」へ変わったのである。

また、冒頭の、二匹による〈クラムボン〉についての会話を〈無邪気〉ととらえたが、そこに、二匹が活発に動く様子は描かれていない。終始川底から水中や水面をじっと見上げているだけである。〈五月〉のかにの兄弟にとって、世界に存在するほとんどのものが〈未知なる存在〉であり、恐れを感じながら生活していたのだろう。そして、〈かわせみ〉の出現によって、世界に対する恐怖心は最大値となるのである。この、〈世界〉と〈かに〉との関係性は、構成図を縦に見ることでとらえることができる。すなわち、〈生き物〉と〈かに〉との関係を見ると、クラムボン以外の魚、かわせみは【食べる側（支配する側）】であり、かには【食べられる側（支配される側）】なのである。きれいな〈かばの花〉さえも、かにの兄弟にとっては未知のものであり、やはり精神的に支配されていると言えるであろう。(図2)

「やまなし」構成図〈五月〉

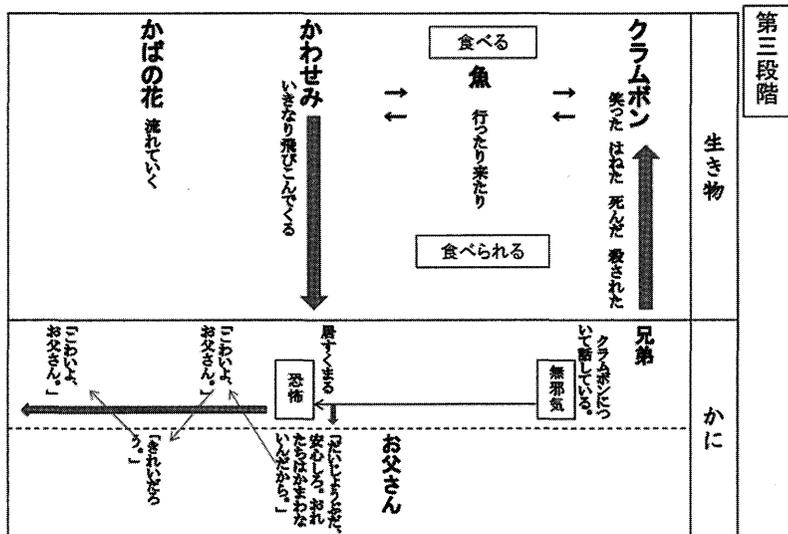


図2 「五月」の構成図（第3段階）

〈十二月〉

第1段階 ストーリーの流れに沿って、【登場人物】を配置する。

第2段階 登場人物それぞれの【主な行動や発言】を書き入れる。

〈十二月〉もまず、「かに」と「生き物」を対比的に並べる。「生き物」として登場するのは、「やまなし」のみである。「かに」は〈五月〉同様、「兄弟」と「お父さん」に分ける。かにの兄弟は〈泡の大きさ比べをしている〉。そこへ、「黒い丸い大きなもの」が天井からトブンと落ちてくる。〈五月〉にお父さんから「かわせみ」の存在を教えられた兄弟は、「上から落ちてくるものは、かわせみである。」と学習し、今回落ちて来たものも〈かわせみ〉と認識して、恐怖に〈首をすくめる〉。その時お父さんは、「そうじゃない、あれはやまなしだ。」と教えてくれる。流れていく〈やまなしを追いかけ〉三匹のかにの親子。好奇心いっぱい、楽しい気分で〈おどるように〉追いかけていく。そのうち、やまなしは木の枝に〈引っかかって止まる〉。お父さんが〈いいにおいだろう。〉と言うと、〈おいしそうだね。〉と食べる気満々の子どもたち。お父さんは〈「二日ばかりするとおいしいお酒ができる。〉と教える。そして、おいしい〈お酒になる〉のを楽しみに、〈穴へ帰っていく〉のである。(図3)

「やまなし」構成図〈十二月〉

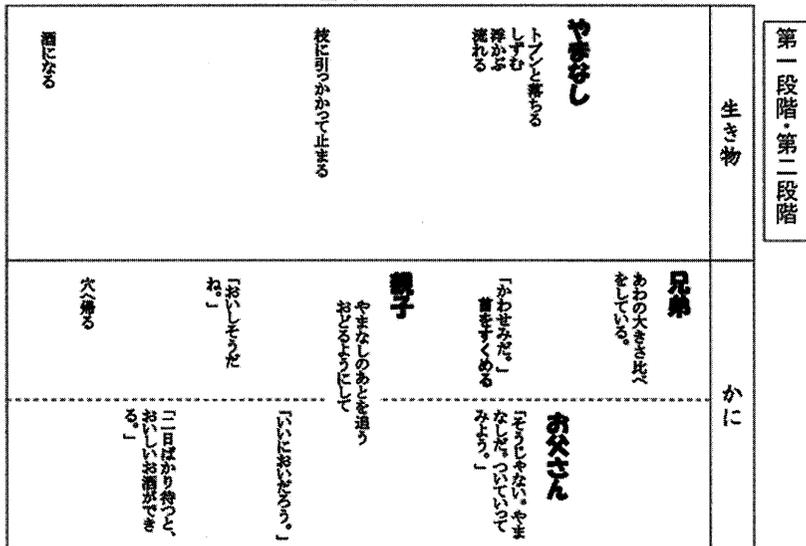


図3 「十二月」の構成図（第1段階・第2段階）

第3段階 人物相互の気持ちや行動の【因果関係】が分かるように、線で結んだり、そこから分かることを書き入れたりする。

かにの兄弟にとって、〈やまなし〉は、〈未知なる存在〉である。だから最初「黒い丸い大きなもの」が水面から落ちて来たとき、「かわせみだ。」と勘違いして、恐怖から一瞬首をすくめる。しかし、お父さんに「そうじゃない。やまなしだ。」と教わることによって、〈五月〉とは違って、恐怖心はすぐに消えてしまう。そして積極的に「やまなし」を追いかけ始める。「やまなし」というものの存在を初めて知ったかにの兄弟だが、これは自分たちに危害を与えない、むしろ自分たちの方が有利な立場にいるということが分かって、恐れることなく積極的に追いかけていくのである。ここに、かにとやまなしの【食べる】－【食べられる】の関係が表れる。また、〈五月〉と違って、お父さんの言葉をしっかり受け止める余裕も感じられる。さらに、やまなしとかにを対比的に眺めてみる。やまなしは、自然の摂理によって木から落ち、浮かび、川の流れに身を任せ、流れていく。そして、枝の存在によって止まる。このように、他の力を借りて行動する、〈受動的な存在〉である。それに対して、やまなしを「おどるようにして」積極的に追うかには、〈能動的な存在〉ということができ、ここに対比関係をとらえることができる。また、やまなしの動きは単純であり、穏やかである。これを【静なる存在】ととらえることもでき、この「やまなし」との対比によって、かにの活発さが際立つという効果もあると考えることができる。(図4)

「やまなし」構成図〈十二月〉

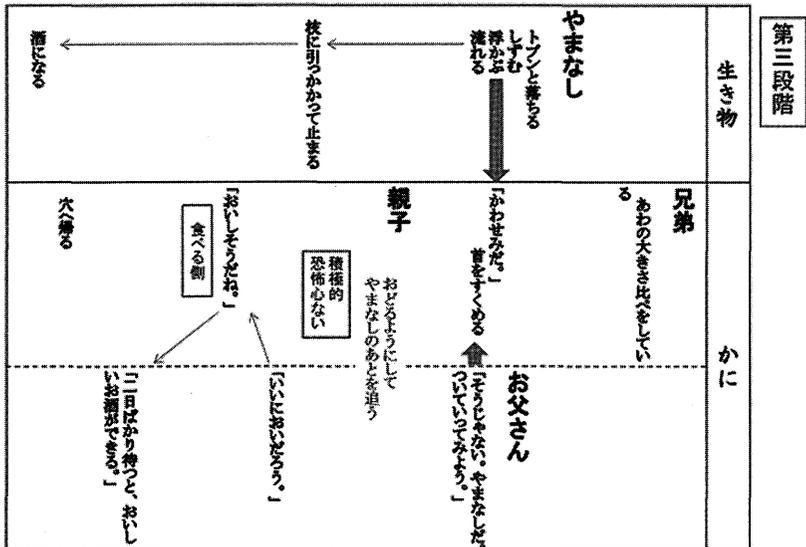


図4 「十二月」の構成図(第3段階)

以上のように、段階を追って〈五月〉と〈十二月〉のそれぞれの全体を把握した後、二つを並べて俯瞰することにより、次のようなことを明確にとらえることができる。(図5)

〈五月と十二月の対比関係〉

〈五月〉と〈十二月〉の類似点、相違点を一目でつかむことができる。類似点としては、「生き物(植物)」と「かに」とのかかわり合いによるストーリーであること、「兄弟が会話しているところへ未知なる物体が突然侵入してきて、父蟹がその正体を優しく教え、美しいものが流れていく」という展開、父蟹は常に冷静であり、兄弟蟹を温かく見守る存在であること、木(枝)から離れ、川に落ち、流される存在という点で「かばの花」と「やまなし」が似ていることを構成図の対比からつかむことができる。また、相違点としては、同様に水中に侵入する存在でありながら、かわせみは、魚という他者を“食べるため”に侵入したのに対して、やまなしは、他者に“食べられるため”に落ちてきたものであるという点、蟹の兄弟にとっては、かわせみもやまなしも(未知なる物体)でありながら、かわせみに対しては恐れを抱いて居すくまり、やまなしに対しては安堵感を持ち、自ら踊るように追いかけていくという点に児童は気付くことができるだろう。

〈兄弟の成長〉

〈五月〉の蟹の兄弟は、冒頭で無邪気な会話をしたり、かわせみや樺の花という〈未知の存在〉に対して恐怖に怯えて居すくまったり、父蟹の言葉を受けとめることができずに、ただただ怖がり、甘えるばかりであるなど、〈幼稚な存在〉として描かれている。それに対して、〈十二月〉では、兄弟はしっかりとかみ合った対話をしながら泡の大きさ比べをしている。また、やまなしの出現に対して、〈五月〉に学んだことをしっかりと生かし、「かわせみだ。」と判断する。また、未知のやまなしであっても、父蟹に「あれはやまなしだ。」と言われただけで、踊るようにして積極的に追いかけるのである。〈五月〉は、「おれたちはかまわないんだから。」と父蟹に教わっても動こうとせず怯えてばかりであったのに、〈十二月〉では、どんなものであるかかわらなくても、自ら「自分たちは襲われない」と判断することができるまで、兄弟は成長しているのである。そして、「おいしそうだね。」という発言からは、自分たちが相手を「食べる側」(支配する側)であるという自覚が表れている。このように、〈五月〉と〈十二月〉を対比することにより、兄弟の成長を明確にとらえることができるのである。また、父蟹は世界の全てを熟知している存在であり、〈五月〉も〈十二月〉も一貫して落ち着いた態度で、兄弟を教え諭す。この父蟹との対比により、兄弟の言動の変化、すなわち成長をとらえることができる。

〈かにの存在感の変化〉

〈五月〉の世界では、早春の季節、動きまわるクラムボン、何かを取って食べるために行ったり来たりする魚、魚を食べるために水中に突入するかわせみ、流れる樺の花と活発に動きまわる生物が描かれ、そこはいわば「動の世界」と言える。それに対して、かにの兄弟はそこから動くことができない。静かに彼らの動きを観察しているだけである(「静の世界」)。この「生き物」と「かに」を対比的に配置してみると、生き物たちによる「動の世界」の存在により、かにの小ささがより際立っている。つまり、生物の世界の中で、かにかいかに弱い存在であるかが浮き彫りとなる。一方、〈十二月〉では、トブンと落

五月と十二月の対比

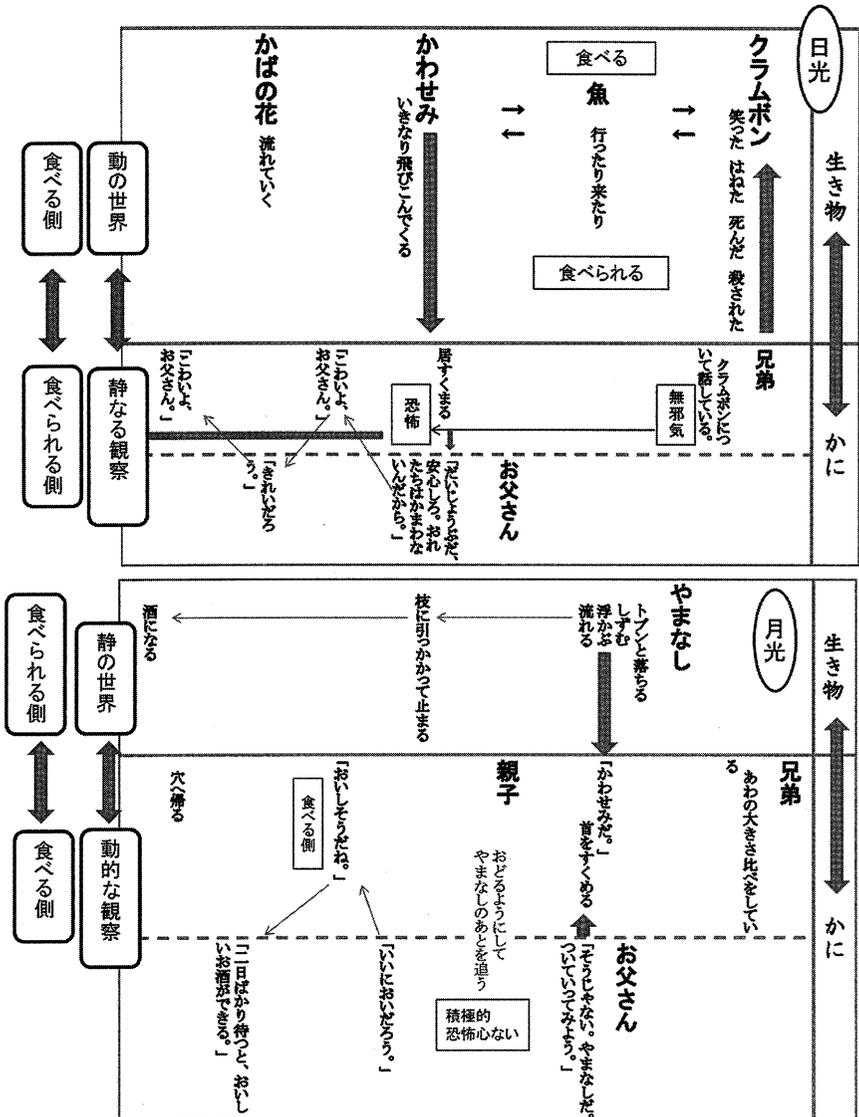


図5 「五月」と「十二月」の対比

ちて、浮かび上がり、水の流れに身を任せて流れ、枝に引っかかって止まるやまなしは、やがて酒となってかにに食される。その存在は静かで、か弱い(「静の世界」)。それに対して、かにの親子は、そのやまなしを追跡し(「動の世界」)、止まったやまなしに対して「おいしそう。」と発言するなど、食べる側として強気な態度を見せる。やまなしの前では、かにの存在感は大きくなる。つまり、〈五月〉と〈十二月〉ではかにの立場が逆転するのである。この自然界におけるかにの立場の変化は、構成図の枠の大きさを変化させることで、視覚的にとらえることができる。以上のように、中心人物「かに」に着目して構成図を対比的に見ると、〈五月〉のかには〈動〉の中の〈静〉であり、〈十二月〉のかには〈静〉の中の〈動〉であるという対比的な構図が明確に見えたとともに、この対比的な構成は、〈五月〉のかにの「静」と〈十二月〉のかにの「動」を際立たせる働きをもっているのである。

「いのち」の意味

この作品は、常にかにの視点、かにの立場で物事をとらえている。ゆえに、〈五月〉のかわせみは、〈十二月〉のやまなしによって否定される。この作品において、やまなしは「生を授けるもの」であり、かわせみは「生を奪うもの」であるからだ。しかし、かわせみはむやみに魚の命を奪おうとしているのではない。水中の平和な世界を侵してやろうという悪質な意図をもって侵入したわけではないのである。ではなぜ「生を奪う」のか。それは、「自らの命に生を授けるため」に他者の生を奪うのである。これは、人間にも通ずることではないか。人間も肉や魚を食べることによって生きている。

かわせみの立場に立って考えた時、「生を奪う」ということの意味は違って見えてくる。自分だけの狭い視野で物事をとらえようとすると、その見える範囲は非常に限られてしまう。相手の立場に立ち、広い視野で見ることによって、それまで見えなかった面に気付くことができるのである。以上のように、「やまなし」は、蟹の兄弟の成長の物語であるとともに、我々読者に「いのち」について改めてじっくり考えることを促す物語と言えるのではないだろうか。

このように、段階的に「構成図」を作成していくことを通して、「やまなし」という難解と言われる文章であっても、ストーリーを大まかにとらえることができるとともに、「五月」と「十二月」が鮮やかな対比構造で成り立っていること、また、作品を貫く主題をとらえる足掛かりをつかむことができること等が分かる。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

①従来の指導上の問題点の克服

段階を追って「構成図」を作成することにより、文章内容が整理され、文章の概要を一目で把握することができた。「構成図」の要素の一つ一つは、読みの学習の初めの段階、つまり通読の後でも十分読み取ることができるものであり、低学年から高学年まで実践が可能であると考えられる。また、この「構成図」は、教材文の長さにもよるが、1単位時間の授業でも十分作り上げることができ、その後、出来上がった構成図

を用いて、深く読み取るべきポイントを絞って学習していくので、従来のように十数時間もかけずに、短時間で効率よく文章を読み解くことができる。また、文章の全体を意識した読みが可能となるため、恣意的な読みに陥ることなく、文章内容を根拠にした読み、客観的・論理的な読みができるようになるであろう。そして、「やまなし」のような難解と言われる教材であっても、「構成図」を作成することで、その主筋（メインプロット）を浮き立たせることができ、児童の物語理解を促すことができると考える。

②賢治童話への適用の有効性

今回の研究を通して、「構成図」という手法が有効に機能するのは、「対比の筋」をもつ作品であることが分かった。この対比にはあらゆる〈もの・こと〉が考えられるが、「セロ弾きのゴーシュ」のように、中心人物と対人物の〈人物像や性格に対比をもつ作品〉や、「やまなし」のように、〈文章全体の構成として対比をもつ作品〉であることが考えられる。さらには「やまなし」のように、物語の抽象性が高く、通読では主筋がつかみにくい作品には、特に有効に機能すると考える。

(2) 今後の課題

①実践的検証

本研究は、現段階では実践のための精緻な素案をまとめたという段階にある。従って、今後は、この手法が実際に児童の物語理解を促すものになり得たかどうかということ、実践によって明らかにする必要がある。

②他作品への適用の可能性

「構成図」の適用の条件についてはまだ検討の余地がある。今後、宮沢賢治の他作品や、他の作者による教材についても、その適用の可能性を探り、本研究における「構成図」の適用条件について考えていきたい。また、適用できない作品については、新たな読みの手法の開拓が必要となる。

(注)

- 1 文部科学省 (2008) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』 pp.17-19
- 2 鶴田清司 (2010) 『〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』 学文社 p.668
- 3 松村明監修 (1995) 『大辞泉』 小学館 p.902
- 4 中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重 (2011) 『日本語文章・文体・表現事典』 朝倉書店 p.74
- 5 本項における「やまなし」本文からの引用は、すべて『国語六 創造』(平成23年度版 光村図書出版) による。

(群馬県富岡市立黒岩小学校教諭 平成24年度修了生)